

古代政治思想とその進化（二）

大西 藤米治

目次

- 一 はじめに
 - (イ) 政治理念の源流
 - (ロ) 王朝と停滞性
- 二 原始社会と政治思想
 - (イ) 人智の進歩
 - (ロ) 核家族
 - (ハ) 原始共産
- 三 自然状態
 - (イ) 樂園説
 - (ロ) 野蛮説
 - (ハ) 靈長説・因縁説
- 四 人間生活の展開
 - (イ) コーメからポリスへ
 - (ロ) 大河と文明
 - (ハ) 大国家への展開
- 五 洪水と神話
 - (イ) 王朝神話
 - (ロ) 選民神話

一 はじめに

(1) 政治理念の源流

政治思想の発達におもいをいたすとき、それぞれの政治理念には、それ相應にその展開過程があつて、それをたどらねば本当にその思想が理解できないことがよくよく納得される。

周知のように「自由」という言葉はギリシャ民族が非常にあこがれ、且つ愛好した言葉であるが、それに対照される「平等」理念については、古代ローマ、乃至はその後ひろまつたキリスト教神学によつても高揚された理念である。「法」という言葉についても、これを古代ギリシャやローマの発明かと思うと、それよりも遠くすでに古代インドでも非常に尊重され、インドでは「法」は「秩序維持」又は「神の掟」にもつながる言葉として、当時の識者間では重視された理念である。してみると、^①「神の掟」と「法」をつなげる思考は、決してギリシャ理念やその後の西欧思想に展開した自然法理念の専売ではなかったことになる。

しかし世間では、自由は勿論、法や正義といった近代的な政治上の言葉まで、その大部分が「古代ギリシャの思想家たちによる都市国家政治の考察及びその反省に由来する」と解されているのである。がこの場合、勿論、こうした理念の一斉開花は、古代ギリシャの全盛期にまたなければならぬ。しかし、その変遷をたどつて、これをその源流までさかのぼるとき、五千年まえにさかえたメソポタミヤの各民族にだって、そうした理念の胚芽がなかったわけ

はない。世上、契約文化のにないてとまでいわれるこれら諸民族の奥底に、契約の基本となる自由・平等の原則が重視されなかったら、そうした傾向を象徴する文明の興隆もなかったろうし、現に前一七〇〇年頃のバビロン王朝がつくったハムラビ法典には、当時、人間の不自由・不平等を肯定する諸制度のなかから、正義と人間の権利を保証する法治国家の端緒さえうかがえるのだが、これらこそ当時の識者がいなく自由・平等の意向を表明したものであり、そんな観点からながめるとこれら理念の法制化は決して偶然でなかったことに留意しなければならない。

思想にも、文明にも、必ずといってよいほど連鎖性がたぐられる。史上に実例をとって、文明を連鎖という面からたぐるとき、たとえば、その源流をメソポタミヤに発するもので、それを色濃くひき継いだのがギリシャ文明、連鎖があるとはいっても、わずかな血すじしか継げなかったなかに、毛いろのかわった咲きかたをしたのがインドの文明といったみかたが成立する。また思想を連続という面をたぐって見たとき、たとえば、メソポタミヤとエジプトの両文明を母体として、それにギリシャとローマの両理念をまじえたのがキリスト教神学といった見解も成立しよう。どこまでも、こうして連鎖の糸をたぐるとき、今日さかに用いられる自由・平等・法の尊重といった近代理念もまた、結局はその源流を遠くオリエントの古代文明までさかのぼれるわけである。

注

- ① サンスクリット語 *dharma* は人間の「行為の規範」を意味し、「秩序」「掟」といった意味にも用いられ、またヴァルナ神のような人倫的支配者、道德的、司法的、神の属性としても用いられる。また仏典ではこの語はもっぱら「法」の意味に使用されるが、西洋思想でいう「法」とは必ずしも同一内容を意味しない。

(四) 王朝と停滞性

ヘーゲルがシナ歴史の各王朝を指して、「神権的専制国家」(Theocratische Despotie)といい、同時にこれを「^①持続の帝国」(ein Reich der Dauer)と評したことはその道の人達のあいだでは有名である。時代の経過を王朝の交替のみで終始し、ほろんではおきる王朝の交替劇を、たとえば一つの軸を中心として回転する車輪のように、ただくりかえすのみで、それ以外になんらの思想的活力も生みだせない歴史、そういった同一コースをくりかえすのみのシナ歴史の反復性を指して、ヘーゲルは、これらの国家は「国家みずからの力では変化させることのできない非歴史的な歴史」だと評したのである。^②

ヘーゲルのこの言葉を、シナと同様、エジプト・バビロニア・アッシリヤといったオリエント文化圏の諸国家にあてはめてみると、これらの諸国家は紀元前十世紀から極めて高度の文明を享有したにもかかわらず、果して「自分の原理だけでは進歩できない」同一性ないし停滞性のみにとどまる性格の国家だったのだろうか。若しそうだと、なぜローマやゲルマン人のように、段階的ながら、自分で自分を発展させる活力を醸成させることができなかったのだろうか、といった問題に逢着しよう。そしてこれを——その結論にもあたる重要問題になるのだが——民主政治を発達させる諸制度の展開が主として西欧圏のみのできごとで、東方圏ではついにみられなかった事実と照合するとき、それこそこの停滞性の問題は政治思想上ゆるがせにできない重要テーマとなるのである。

世上、政治思想の歴史は、そのほとんどが古代ギリシャから執筆され、ギリシャを踏み台として説きおこされるならわしになっている。それほどギリシャは、文化的にも思想的にも大切であり、華かであった。が、さりとてギリシ

ヤの文明といえども、根なし草に瞭乱の花が咲く道理がないように、突然ポツカリ降ったり、湧いたりしたものでなからう。とすれば、これを育てたその根元にあたる毛根の一つ一つまで洗いだす方式、即ち思想の変遷と経路を逆及する方法のなかに、あるいはこれら問題解決のいとぐちがみつからないだろうか。文明や国家がもつ政治理念を、遠い昔にまでさかのぼってまで調べる所以がそこにあるわけである。

注

① G.W.F. Hegel, *Die Vernunft in der Geschichte*, herausg. V.G. Lasson, Dritte Aufl., S. 236.

② Hegel, *a.a.O.*, S. 234.

二 原始社会と政治思想

(1) 人智の進歩

人類の発生は早くて一五〇万年まえ、おそくても六〇万年以前といわれる。といえは非常にながい昔のようだが、このあいだ地球は今日と同様の気候ではなかった。いくつかのけわしい寒暑の峠、乾燥や湿潤といった人間には住みにくい環境を経過しなければならなかった。したがって人間は、その大部分のあいだ、ただ生きるための自然との闘争に、そのほとんどの精力を消費しなければならなかったのである。この区間にあたる時期は、史上、考古学では旧石器時代に属し、そのあいだ人間の知恵は極めて低調で、長い期間の経過にもかかわらず、生活上ではわずかながら

の進歩がみられるに過ぎない。

人智の進歩も、人間の生活向上も、環境の安定が大きく影響する。人間発生以来の地球では、このように著しい気候の変化が連続し、地球が今日とほぼ同じ自然と気候に落ちついたのは、ここ一万年このかたのこと。したがって人智が大きく進歩し、人間の生活が大きく向上したのは、それ以後のことである。

それ以前といえば、人間発生このかたのほとんどにあたるながい期間ということになるわけだが、この長い期間が文字どおりの原始時代である。この間の人間生活は、狩猟にのみあけくれ、鳥やけもののもつ知識を追ってたださまよったに過ぎなかった。

政治学者ダンニングは、この原始生活におけるた人間のいだいた政治思想の問題をとりあげ、原始的な諸制度に関する知識は「最近の研究によって、いちぢるしく拡大した」とはいえ、それでも「われわれのもつ知識は広漠かつ漠然としたもので、いまなお憶測と論争の域を脱していない」^①状態なので、今日はまだ学説としてとりあげるべき段階ではないと述べている。そして今日斯界で述べられている諸説に対し、「原始的政治学説は、全く政治学的ではなく、社会学的である」^②とさえ評している。

事実、原始時代の政治思想には憶測の域を脱していない学説も多数ある。したがって、こうした原始生活の人間を対象して、政治的意識の存否やその思想を究明する問題は、考古学や人類学、あるいは当時の一般歴史乃至は社会学の展開をまっぴら、確実な知識からできた基盤のうえで進められるべきであろう。今日ではまだ、原始時代の思想研究については、まわりの信憑性を収集することが先決であろう。

注

① W.A. Dunning, A History of Political Theories, Ancient And Mediaeval, P. XVI.

② Ibid. P. XVII.

(四) 核 家 族

人間とサルとのけじめを決定づけるわけかたのひとつに、それらが生活する社会構造の相違があげられよう。

サルも人間も群居する動物である。が、サルのそれは、単なるむれの社会であり、そのむれについても、それをよくながめると、サル社会ではそれぞれのサルが自分で自分のことを処理するしくみになっている。なるほど、サル社会ではボスザルがいて、それを中心とした個々ザルとのつながりもたどれよう。が、個々のサルは自分で自分の食糧をあさり、オスとメスのむすびつきも、そのときによって相違する。すなわち、独立した個々のサルが基調となつてひとつの社会を構成している。これがサル社会である。

それにくらべて人間の社会は、最も原始的な狩猟生活のころですら、そこに家族制がみとめられ、家族内では夫婦関係が秩序だつていて、食糧も財産もすべては家族共通のものとなっている。

狩猟がもつぱら生活手段であつたころの人間生活では、外部的にけだものを追う荒っぽい仕事は男性の分担であり、女性は内部的なやさしい仕事と育児を分担する。そこにおのずから両性の体質による労働の分業がみられるなかに、これを円滑化するため、すべてが夫婦共有といった家族的共産制がとられる。こうして一組の夫婦とその子供からなる核家族、これが人間の「あけぼの時代」から狩猟生活を通じて、決してかわらない最少単位だったのである。^①

ときには、この核家族が数組そろっておなじ家屋内に住むといった複合体だったのもあろう。またあるときは、これらの家族のいくつかが集って、集団を組織して生活する場合もあったろう。しかし食糧源を自然の増殖のみにたよる素朴な生活。そんな時代の生活はきわめて不安定で、すべてがぶつつけ本番。豊猟の際の余剰物資を不猟にそなえてたくわえる、といった生活の智慧も技術もまだ工夫されない幼稚な時代が人間の歴史にはあまりに長くつづいた。これが原始時代の生活の実態である。そんな時代には、今日の政治学で対象される「搾取」とか「支配と服従」といったむずかしい人間関係や社会制度は、まだはっきりとみとめられなかった。夫婦を基調とする核家族のみが、確実な人間関係として立証できる時代だからである。だが、人間関係のむすびつきという面では、この核家族が人間の社会構成のはじまりである。そして莫大な人間組織をもつ国家といえども、それはこの核家族が構成単位であり、それが組織的に拡大していったまでにほかならない。

アリストテレスも彼の「政治学」では、人間の社会生活は先ず家族からはじまることを明言している。

注

① しかし厳密な意味で、人類社会の原初から家族が存在したか、それとも原初の社会はいわゆる「群」であり、家族は歴史のある段階で発生したものかについてはいまだに論争の過程であり、識者の意見は一致していない。なぜなら家族の歴史は男女の結合の歴史と関聯して考察すべきものであり、乱婚、多夫多妻婚時代の実態に果してそのころ定まった家族の概念を想定できるか否かの問題とあわせて考慮されねばならないからである。また家族の問題については、家族の歴史を社会進化論の立場から解説したL・Hモルガンの「古代社会論」は唯物史観の立場にある学者から信奉され、これを無視して「家族」問題は論じ得ないとまでいわれている。

い 原始共産制

おなじ血族の人間を韌帯とする氏族の集りや、その氏族を核としてむすびついたひとかたまりの社会、こうした血縁を主軸とした社会に対し、その社会の構成単位を家族が集ってできた社会とはみないで、かわりに氏族制という氏族を一括的にとらえて、これをその共同体の構成単位とみなす学説がある。この学説では、土地や家屋は勿論、働いてできた生産物のすべてまで、それらがその氏族の共有物だとみなす方式がとられているわけだが、こうした見解を主張する学説を「原始共産制」と呼んでいる。

この原始共産制の場合、その社会では生活に必要な衣・食・住、その他の必需物資獲得に要する労働は勿論、その分配・消費にいたるまで、すべてがその成員によって共同に行われるとみなされるわけだが、こうしたすべてを共同的にみる見解は、通常、家族を単位としてみることに馴れている今日の一般の人達にとっては、なんだかこじつけのようにみえて、なかなか納得されにくいのが通常である。

が、いまの日本でも農山村にゆけば、部落ではその部落共同の山林ないし「草かり場」といったものを共有しているところが沢山ある。こんなところでは、そこに成育した樹木ないし飼料をその部落の人達のあいだでは共同または個人で切りとったり、採取したりできるおきてになっいて、そこでの採取物は個人の所有となすこともあれば、部落の経費またはその他の経費をまかうことにあてられる場合もある。こうして部落民には自由だが、さりとてこの地域への他部落民の出入は厳重に取締られる慣習になっている。古代の未開狩猟民にとっても、氏族ないし小地縁集団のような共同体を「持ち主」としたこうした一定地域の「狩り場」がいたるところにあったことは容易に想像でき

よう。いわば「おらが猟場」というわけ。ところでその場合、この「狩り場」で採れた「えもの」を、たれの所有とも定めないで、その狩り場の所有である氏族共同体そのものの所有となすならわしたと思えば、ここでの共同体の共有觀念については無理なく理解できるわけである。

また、納得のいかぬ共産制という言葉については、みかたをかえて、たとえば一般家庭の家族の財産という面を考へるとき、それはその家族にとってはその成員全体の共通・共有の財産であり、いわば家族を主体とした共産制にはかならないのだから、そんなときの家族の共有理念を、そのまま氏族の共有にまで拡大して解釈すれば、共産という言葉についてもうなずける見解であらう。

では、なぜ家族を単位としないで氏族を一括単位の規準にしたかについては、未開社会では文明社会にくらべて、生活の全領域にわたって共同体の連帯感が強く、人間の心の奥底にまで氏族を単位的に一括し、すべてをその共有とみなす感情が全体的にしみわたっていたことを考慮すれば容易に納得できるわけである。こうした実状をとらえての学説が原始共産制である。^②

原始共産制は、このように古代社会における人間生活に対して、現代人が追想するひとつの憶説にすぎない。したがって勿論これとは反対意見も当然でてくる。たとえば今日、古代人のねむる古墳や旧跡を発掘するとき、そこには古代人の遺骸のそばに、曾ては生前そのひとが愛用したであろう副葬品、個人的でなければ使用できないとおもわれる武器や装飾品が多数あらわれることである。元来、愛用品や武器は、そのひと個人の所有を意味する。ところで、これらの遺品は、未開人が死者の霊魂とともに、生前の持ちものを死後の世界に託す慣例ともみられるが、とすれば

こうした副葬品の出現は古代人に所有と財産の觀念があつた有力なき^い手ともなろう。してみれば、眼前のこうした証拠品まであるのに、それを否定する原始共産制は現代人が好んで考えるフィクションに過ぎないとなすのが反対説の根拠である。

共産制を肯定する説、否定する説。いずれにしても曖昧模糊とした古代社会の究明である。けれどもこれは、いろんな学説の基本となるので暗中模索のなかに、まだ当分はこの史学論争は続きそうである。

注

① 日本の村落における山林の共同所有は個人が一定耕作地を所有するほかに、こうした共同所有の慣例のあることを示した一例に過ぎない。完全な共同耕地の問題についてはハンセン (G. Hansen 1809—94) が村落共同体説 (Dorf-gemeinschaftstheorie) を提唱したほかに、マウラー (G. L. V. Maurer 1790—1872) によつて提唱された一定地域を共有して私有地をもたない耕作者の団体がゲルマン人の間にあつたことを肯定するマルク共同体説 (Markgemeinschaftstheorie) がある。

① しかし原始共産制は、こうした共同体的連帯感とは別個に、共産制を氏族制乃至集団にむすびつけて研究すべきだとなお別の見解もある。原始共同体の研究については Fustel, de Coulanges; La cite de antique. また他に古代社会の研究については Lewis Henry Morgan, Ancient Society.

三 自然状態

太古における人間生活にたいして、二つの極端に相違した見解が成立している。即ち原始時代を楽園とみる見解

と、反対に弱肉強食・優勝劣敗の野蛮社会とみなす見解とであり、この原始時代の人間生活がどう解説されるかは、人間の「自然状態」のありかたを論拠にして、それから展開した学説が政治思想では多いだけに、この領域では一応、重要テーマとなっている。

(イ) 楽園説

楽園思想を表明する見解の第一は、聖書にいう「エデンの園」である。史實的に、このエデンと称する土地はいわゆる「聖書地域」に実在した土地で、それはメソポタミヤ平原を流れるチグリス川の河口ちかくに約前二千年の昔さかえた都市国家「ラガシュ」の神殿領。そのエデンという言葉はシュメール語でいう「平野の首」という意味にあたる。よほど昔から開墾されたよい耕地だったとみえ、「ラガシュ」とその近くの都市国家「ウンマ」とが二百年の久しい間にわたって争奪戦を演じたほどのいわゆるくづきの土地である。

周知のように、宗教物語では、人類の祖先であったアダムとイブの住んでいた世界には、無限の食糧が大自然からあたえられ、働かなくともおのずから生命がささえられる構成になっている。そればかりではない。この世界には、悪もなく罪もなく、人間は生まれながらの自由な存在として、誰れからも拘束されないようえがきだされている。いわば勞せずして喰える楽園を空想した一種のフィクションというわけだが、こうした楽園を、これが人間本来の自然のありかたとして主張されやすい原因は、この聖書にかかげられている人間の原初生活をえがいた状態が、われわれの先祖が氷河期時代に実際に史実上体験したのではないかと推測される環境や生活方式と非常に酷似しているからで、そのためフィクションと史実が混同してしまふところに複雑さがある。

このような楽園思想を標榜する思想はギリシャ時代にもあった。前七世紀のヘシオドスは「仕事と日常生活」という詩のなかに、これによく似た見解を詠んで、太古における人間の自然生活を謳歌している。概略は、

最初の人間生活は、神さまと同様、なんの心配も苦勞もなく、老衰のみじめさも、災害も、全くない豊かなパラダイスに安住できた。ところが人間は、神へのつとめをおこたった罰があたって、だんだん墮落し、その結果、早死・乱暴・驕り・戦争といったいやなものばかりがこの世に、はびこるようになった。そしていまでは、昼は仕事の苦勞でなやまされ、夜は心配ごとで疲れはててしまふ。全くもって、住みにくい世界になりはててしまつたもんだ。

といった主旨を詠んだものである。

「自然状態」をパラダイスとみる思想は、人間を本来的には自由・平等なものとして、換言すれば誰からの搾取も支配もありえない本性を所有すべきものとして解説する方向へと学説的に展開していった。そしてこうした見解を、その方向へさらに推しすすめたとき、人間は本来的には「自分で自分を支配する権利」をもつべき性格のものという解釈になり、それは結局「誰からも支配されない」かわりに「誰をも支配すべきではない」性格の持ちぬしといった論理にまで拡大して解説されていったのである。

したがって、この理念は政治学では、人間関係にみられる支配・服従問題を解くときの有力な手がかりとして、また政治権力を個人にゆだねるときのきめ手として、西洋思想のやたいばねにもあたる基本理念となっている。

(四) 野蛮説

太古における人間の自然状態を、こうしたすばらしい樂園とみる見解とは逆に、闘争にあげられる野蛮な世界とみなす反対見解がある。

チャールス・ダーウィンは彼の進化論において、適者生存の原理が生物界を支配する原則であることを主張し、生物はすべてが下等なものから高等なものへと進化するなかで、自然淘汰の結果生きのこったもののみこの世界に現存できる事実を学説的に発表した。自然淘汰とは自然の摂理と変化に対応し、そのなかから適者のみ生存できることが自然界の原則であることを表明したものであつて、この学説は結局、生きるためには優勝劣敗・弱肉強食の激烈競争が生物界のすべてに適用されるきびしいならわしであることを示唆するものであつた。

この論理からながめれば、人間界の「自然状態」も、決してこの例外ではありえないという見解が成立し、この世は樂園から転じて闘争の巷に化するわけである。

またこれと同調するもので、人間は野蛮な乱婚、プナルア婚（半血族的な婚姻）からはじまって、未開な多夫多妻婚を経て今日の文明へと進んだ、と解説するモルガンの「古代社会論」がある。この学説は人類文化の発展を野蛮・未開・文明の三段階にわけ、それら進歩の過程のなかで原始共産制の存在や私有財産の起源等を論ずるなど、広範かつ多彩にわたって論説を展開したものであつて、のちにエンゲルスの共産主義学説の基本となったほど影響するところも大きい学説だが、そこには古代における人間生活の実態に樂園思想を織りこむほどの余裕は、全然、みあたらないことになっている。

えてして、学問的な見解の諸説には、冷厳な古代社会を裏づける論説が支配的である。神話や詩歌と違って、この観点からではそれほどあまく考える余裕が古代社会の人間生活の実体にはありえなかったとみるのが妥当な見解だろう。

注

① ダーウイン Charles Robert Darwin (1809~82) の進化論 (Deszendenztheorie) はその著 “Origin of species by means of natural selection” (1859) 及びその他の著書において論ぜられた種の起源及び自然淘汰説を主体としたもので進化の事実そのものは各方面から立証され、今日ではこれを疑うものはない。

② モルガン (Lewis Henry Morgan) の「古代社会論」 (Ancient Society) は社会を進化論的に解説したもので、この学説はマルクス及びエンゲルスを魅了し、後にエンゲルスの「家族・私有財産及び国家の起源」 (The Origin of the Family, Private Property and the State, 1884) と題する論文の基礎論文となったほどである。したがって、この思考はまた共産主義思想のバックボーンを形成した理念でもある。

い) 霊長説・因縁説

聖書にかかげられた「エデンの園」について、その平和郷をかたるくんだり、その平和理念についてではなくて、この神話に登場する人物、すなわちアダムとイブを人類の先祖となす構想について、思想面で大きな波紋をなげかけた問題がある。それは人間の由来を説く、いわば由来説とでもいえるもので結局は人間の本来的なありかたにもつながる問題である。

宇宙の始源を説き、次に人間をこの世という舞台に登場させるため、話のすじになにかの動機をこしらえて人間の

先祖を登場させる。これはどこの国でもよくある普通の神話常識である。ギリシャも、シナも、日本も、そして他の国ぐにでも、最初、人間の誰かが忽焉としてこの世にあらわれ、それがその民族独特の先祖だと神話に語らせる。そこには論理的に、どんな不合理があっても神話のことであってみれば、誰も問題にしないはず。アダムとイブだって、その点、同然である。

が問題はそうではなくて、この物語が旧約聖書に掲載され、内容が信仰に対象されるのゆえを理由に、神話が布衍する内容を拡大解釈したことで、これと背馳する異説のすべてを異端の罪に問うまで極端に玉条化したところにある。拡大解釈されるこの推論の構成はまったくあどけない。アダムとイブが人間の先祖だとすると、人間ははじめからこの世に立派な人間のすがたをととのえ、完全な素質をそなえてあらわれたことになる。そうとなれば、人間はサルや他のケモノとは最初から断然違うわけで、これをなにかに利用するため誇張して表現したいこともある。ましてそれが聖書にかかげられたとあっては、信者の立場からすれば最高度にあらわしたくもなる。そうした意図がかさなりあって、ここに発明されたのが、人間ははじめから畜生とちがって「万物の霊長」だという言葉である。

これと対立する思考に、仏教でいう因縁思想がある。人間とサルはいちばん近い親戚で、その相違は「はだに生えた「毛・三すじ」がせいぜいの違いとまで近親化され、人間とすべてのいきもののあいだには、どんなちいさなむしけらにいたるまで、なんらかの因縁があるものと構想する。いわば生命あるもののすべてに慈悲をたれ、近きより遠きにいたるまで多少なりともなんらかの連継とあわれみを投げかける。これが因縁説である^①。

ところがこの因縁説は、皮肉にも、人間のみを超然ぬきんじた動物とみて、はじめから別あつかいする霊長説とは、

まったく対立する結果になるのである。なぜなら、たとえば一方はサルと人間は親戚だといい、他方では断然はじめから別の動物だと主張するからである。しかも因縁説には偶然ながら、こうした宗教的見地と違って、もっぱら学問的見地から立論された生物の進化論ともたまたま一致して、サルと人間の親戚問題では「最もちかい親戚」あつかいした点で、まったくの偶然とはいえ、因縁説が学問的に裏づけされたかの観すら呈した結果になった。

人間の由来を説くとき、万物霊長説をキリスト教が生んだ最も典型的な西洋思想とすれば、因縁説は仏教思想が生んだある意味では最も東洋的意識の濃厚な表明ともみられる。人間を、どのようにあつかうかで、はからずも極端に対立したこの演出方法の相違性こそ、まさに思想界の生んだ、とんだ皮肉ともいえる。

ところで西洋では史上、近世中期まで、この霊長説を「神の掟」とみなして固守したため、これまた幾多の学問的諸説と混乱を生じたことは周知の通りであった。それは、博物学者リンネが生物分類表のなかに、人間を「ホモ・サピエンス」として挿入したことすら神への挑戦とみなされ、神の冒瀆ぼうとくとして反発した理由と、まったく同一の論拠に立ったものであった。

神話「エデンの園」は、とんだところまでとばっちりとばっちりをなげたものである。

注

- ① 因縁の因は直接原因、縁は間接原因、従って因縁とは現象界の生滅変化には必ず直接・間接の多くの原因がかさなりあっていると解する仏教用語である。またこの言葉は縁起（えんぎ）思想としても用いられる場合もある。

四 人間生活の展開

(イ) コーメからポリスへ

まだ政治学が、倫理学から独立しなかった古代ギリシャの終り頃、はじめて当時の都市国家を対象しながら彼の「政治学」^①という著書を書いたアリストテレスは、その著書のなかで人間社会を、最初は家族から、つぎに村落、そしてやがてこの村落が拡大して都市国家になったと指摘している。^②

狩猟時代でも、人間生活には家族が基本であったことについては前述した。が村落は、まだつくられなかったのである。ところが人智の進歩は、人間生活を固定させたこの村落形成以後のできごとなのである。

史上、人間生活の展開には二つの大きな革命が経験されている。その一つは十八世紀末におこなわれた産業革命で、思想的にはそれとほぼ同じ時期に勃発したフランス革命にともなう啓蒙思想の展開と、それに関連する一連の契機をさすのである。これについては、今日とほぼ同じ生活様式を条件づけたに契機だけに、誰でもすぐに納得されよう。が、いま一つの革命については、なかなか思いつかないのが通常である。けれども、考え方によっては、この思いつかない最初の革命の方があるいは、もっと大きかったともみられるほどである。

それは人間が、これまでの長い狩猟と放浪の生活から脱皮して、農業と牧畜を生業とする環境、即ち地域的に落ちついた固定社会をつくった転機を指しているのであって、ひとたび地域的に生活を固定させた人間は、これが踏み台

となつて、やがて国家生活をいとなむまでに成長する。したがって、人間文化の向上と政治思想の展開をさぐる意味では、かえつてこの方が重要ともみられるほどである。

もとより、こうした固定生活をいとなむ以前の人間生活は、せいぜい血縁を同じくする同族がつくる社会か、あるいはそれに同調するわずかばかりの仲間によって構成された集団に過ぎなかった。ところが、このような原初的な社会生活でも、生活の場が決定すれば、仲間の集団から村落ができ、村落は集つて都市となり、都市はやがて附近の領域をあわせて都市国家となる。こうしてできた都市国家が、さらには統一国家となり、結局は世界国家へまで拡大される。これが国家成長の過程をしめす一連の軌道であり、一般展開のパターンでもあるわけだが、そうだとすれば生活を定着させた農牧社会の成立は、最初に人間生活をこの軌道に乗せて、国家発展の途上に出発させただけにその意義は大きからう。あとは人類が大国家形成まで、ただその軌道を走ればよいという単純さにもたとえられる。ともすれば、思い出せないほどの人間最初の生活革命も、われわれの国家生活にとっては、そんな深い政治学的意義をもつのである。

注

① アリストテレスは政治概念と倫理概念を一応分離することによって、最初に政治学に独立性をあたえた思想家といわれているが、このことについては、この両概念の分離が論理的な研究の結果というより、むしろアリストテレス自身が倫理的問題の解決の方法として採つた分析方法の偶然の結果であることはダンニングの指摘するところである。(William A. Dunig, *A History of Political Theories, Ancient and Medieval*, 1919, p. 51 ff.).

② こうした国家発展の解説方法については、いくつかの解説方式のなかからアリストテレスは「族父権説」(Patriarchal-

theorie) を採ったとみられている。(Vgl. Jelinek, Allgemeine Staatslehre, 3 Aufl. 1928.S. 197)

(四) 大河と文明

西紀前二千年といえは、いまからざっと四千年のむかし。その頃、誰かが若しこの地球の圏外にたつて、高い大空の雲間からこの地球の表面を俯瞰したとしたら、どんな光景が目映じたであろう。

メソポタミヤでは、チグリス、ユーフラテスの河ぞいを点綴しながら、パレスチナからペルシャ湾へと曲線がたどれるいわゆる半月地帯^{はんげつ}では、すでにそれより二〇〇〇年もまえから美しい文明が軒をならべて咲きほこっていたに相違ない。砂漠にかこまれたこの半月地帯^{はんげつ}は、石器時代このかた、西欧で古代ギリシャやローマが文化的に黄金時代をきづくまで地上いちばんの、文明の中心だった地域だからである。

そしてこの地域を遠ざかるにつれて、文明の燭光は次第にうすらいで、暗黒と未開のとばりが附近一帯をおおうなかに、遠い地中海の方向にかすかに文明の光が輝いている。これがクレタ島で、そこにはミケナイ文化を生んだトロイアの街なみがひらけていることになるのだが、それとは対照的に、すぐ近くのバルカン半島ではまだ青銅時代。西欧一帯のところどころには、わずかに木製の鋤や鋤で農耕する住民の姿が散見できるといった光景であろう。

ひるがえって東西交通の要衝インド半島に目を転ずれば、ヒマラヤのふもとではインダス河の沿岸に、孤立した特有の文明がこれより千年もまえからまたたいている。中国では最初は黄河流域に、それよりすこしおくれで華南地区の揚子江流域に、ようやく殷周王朝の農耕文化期がおとずれたばかり。都市文明期に、はいったばかりの両地域を除

いては、シナ大陸では暗黒地帯からまだいくらかぬけだしていない状態だったろう。

アフリカ大陸では、わずかに東北端のナイル河沿岸をのぞいて、すべてが睡眠状態。大西洋のかなたのアメリカ大陸では、まだその頃は完全に暗黒が支配した時代で、それから数世紀後にならないと文明のおとずれすら期待できない当時はまだ人かげもまばらな時代。こんな光景だったと追想されるのである。

私達がひとくちに古代文明といった場合、それは部落が大きくなって巷街^{まち}ができ、一定の階級制度をととのった社会がすでに組織されていて、人間の生活程度もたとえば金属器を使用するといった、ある程度科学的に発達した段階を指しているのである。ところが、こうして二千年前の世界を一瞥してみると、人間の文明は民族的にも地域的にも決して同一步調でこの段階に到達したものでないことがわかる。むしろ、最初はごく「限られた地域」にのみ文明が成立し、他のほとんどは未開のまま放置されていたとみられるほどいわば跛行性がめだつのであって、その場合ここでいう「限られた地域」とは「大きな河川の流域」に限定されてることに気がつくのである。

すなわち、これを裏づけるように、世界最古のシュメール文化はチグリス・ユーフラテス河流域に、ナイルの沿岸には古代エジプト文明が、インダス河流域には北はパンジャップから南はボンベイにまたがるインド文明が、そして黄河流域には殷周文明がさかえたわけだが、これらはすべて大河の流域をねじろとしてさかえた文明である。

これを指して、学者のうちでは「大規模灌漑が必要とする水力農業」をその成立要因とみなし、こうした着想を「水力社会」とまで呼んで強調しているものもあるが、この意見に対しては灌漑のもつ意義をあまりに強調しすぎるとみる反対意見もあって、かならずしも史家の評論は一致していない。しかし、灌漑が文明成立にとって重要意義を

もつことは事実で、これがまた政治的に古代国家の育成にも、その促進要因となったことは疑いえないところである。^①

注

① Karl A. Wittfogel, *Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power* (Yale Univ. Press 1959) 24-25
ウィットフォゲルは治水文明を提唱し、西洋的社会が一般的に小規模な灌漑農業、たとえば水利農業 (hydroagriculture) といった程度のもに依拠しているのに対比し、東洋的社会は国家的な大規模水力方式即ち「水力農業」(hydraulic agriculture) に依拠しているとなし、これを東洋的専制国家の成立の原因とむすびつけている。

い 大国家への展開

今晚、降った雨が翌朝の洪水となるのは日本の河川である。大陸では上流で降った春の大雨が、秋になってようやく下流の氾濫となる。農耕だけを考えれば、大河の流域にみられる肥沃な平野がいかに古代人にとって魅力的であっても、大河にはつきもののこうした水害を克服し、適切に自然の暴威を処理しえなければ、せっかくの豊富な水量も農業経営に転用することはできない。とはいえ、相手が大河であってみれば、それにはどうしても一種族や一共同体の力だけでは、とうてい手におえない大きな灌漑土木工事の遂行が不可避となってくる。

その場合政治的にも大河の利水や管理は容易ではない。それには人工による水路の開鑿や堰堤の構築といった技術面のほかに、上流と下流の協同した堤防修復や水量調節といった、河川に添ってひらけた上下共同体の大同団結を要請する要素がいくつもあげられるからである。また水利権の統制管理には、それぞれ協議されたおきてが定められてあっても、なにかのきっかけで、ながい間にはそれをめぐって共同体間の紛争にまで発展することも屡々ある。^①そ

んなときの調停役には、それら共同体をおさえられる強力な秩序維持が、どうしても必要となってくる。大河に添った上下の共同体が大きくまとめられ、強力国家を生みだす必然性がそこにある。

史上この原理を卒直にたどって、それをすじがき通りに出現したのがエジプト王国であり、そしてバビロニア王国であり、更にはまたシナ国家でもある。ドイツの史家エドアルド・マイヤーは、これらの大国家や文明育成が、こうした同一原理の基盤と性格の上にたって築かれた事実について「これらの三国は極めて似かよっていて、河にそつたいらな流域にあること、規則的氾濫によつて沃土がもたらされたこと、海の近くにあること」などをあげたのち、その次の言葉として、それらの地理的条件が「強度の文化をうながし、あるいは強制し、そして政治機構の組織化を要請した」ことを指摘して、強力国家育成に河川が拍車した事実を強調している。^② 実に水をおさめることは国をおさめるのはじめであり、大河は大国家の建設を慫慂する動機でもある。

注

① 水利権の争いについては、いずれの国でも相当敏感に政治的問題として反映しているが、メソポタミヤではまたをモラガシュ (Lagash) とウンマ (Umma) と水争いは有名である。

② Eduard Meyer, *Histoire de L'Antiquité* (1884) trad. Maxime David, t. I, Geuthner, éd., 1912, p. 226.

五 洪水と神話

人間生活にとってこわい天災、それはむかしから地震・かみなり・火事とされている。が、とはいってもそれらは

人間のすべてを根だやしにするほど恐怖すべきものではない。ところが洪水は違う。大河が氾濫して地上はすべて満々たる水びたし。しかもそれが幾日も経過したとあっては、地上の動植物はすべて死滅するから、人間も喰うものがなくなって結局死んでしまう道理になる。だから古代人にとって、最大の恐怖は洪水である。そこでその洪水を神話に託し、政治上乃至は信仰上の人心収攬に利用すれば古代人には最も効果があることになる。洪水神話が世界のいたるところに流布される所以はそのためである。

(4) 王朝神話

シナの神話である。歴史の記載によれば堯の時代には長期にわたる大洪水があり、それも二十二年の久しい期間にまたがったことだったという。田畑は大波の底にしずみ、穀物はすべて水をかぶって腐くさってしまう。人々は飢えと寒さをしのぐのに、ひどく難渋しなければならなかった。

天子の堯心をなやまし、諸侯に下問した結果、鯀こんを派遣して治水にあたさせた。が、鯀は洪水をおさめることができなかった。その責任を問われ羽山に殺された。ところが鯀の死骸が三年たっても腐らなかった。不思議におもい、その死骸を切りさいたところ突然一匹の蚪竜きゅうりゅうが飛びだした。これが禹である。

禹は父の意志をつぎ、水を治めるため黄河にいき、河の精である河伯に会う。河伯から水のしたたる紺色の石をわたされた禹が、その石をよくみると石には治水の地図がしるしてあった。こうして水を治める方法に充分な確信をえた禹は、更に竜門山で人面蛇身の神、伏羲ぎに会い、天地を測量する玉器をさずかり、こうしてもらった地図と玉器によって洪水をおさめた、と。^②

これは夏王朝の始祖帝舜より、治水の功により天子に讓位されたと伝えられる有名な禹にまつわる神話である。禹は在位十年とはいえ、はじめてシナを九洲にわかち、貢納の制をさだめて政治の公平を期するなど、その功績は顯著なものがあつた。ために、その子孫は諸侯の同意を得て、シナ最初の世襲王朝として君臨したほどである。

ところで世襲王朝には王朝強化のため、あらゆる手が打たれるのが常識で、なかにはわざと工作されたものすらあるのが通常である。禹王朝といえども例外ではなかった。そうした基盤強化の妙策として、当時民心の最も恐怖のまゝとであつた洪水に取材して、先祖の禹をその治水工事に関連させることが人心収攬しうらんに最も効果的だったので、こうした神話が語りつたえられるようになったのだらうと推測されている。

注

① 鯀とは歴史では堯の時代の「崇」地方、いまの陝西省鄂県の東に封ぜられた「伯」であり、その故に伯崇鯀と呼ばれたと。しかし神話では鯀は一頭の白馬であり、この白馬は天帝の孫ということになっている。

② 袁珂「中国古代神話二」 みすず書房発行（六三一―八二頁）

(四) 選民神話

民族の起源を統一的に説明するなかに、みずからの種族のみに、他の種族と違って卓越性を根拠づけるためには洪水神話が効果的である。その場合のすじがきとしては、雑多な他民族が洪水によってまともに死滅するなかで、自分の民族の祖先だけが神助によって助かる方法にすればよいわけである。それにこの方法によると「神のおぼしめしによって生存する」という民族の歴史に対するハクづけにもなる。いわば一石二鳥というわけ。こうした神慮による

選民思想をあらわす代表的神話、それが聖書「創生記」記載の「ノアの箱舟」である。この神話では選民方式が、あざやかにうきぼりされている。

時に世は神のまえに乱れて暴虐が地に満ちた。……そこで神はノアに言われた。「わたくしは、すべての人を絶やそうと決心した。……わたしは地の上に洪水を送って……「あなたは子らと妻と、子らの妻たちとともに箱舟にはいりなさい……」ノアはすべて神の命じられたようにした。箱舟は水のおもてに漂った。……地のおもてにいたすべての生きものは……みな地からぬぐいさられて……ただノアと彼と共に箱舟にいたものだけが残った。神はノアとその子らとを祝福して彼にいわれた。「生めよ、ふえよ、地にみてよ」……全地の神は彼等から出て広がったのである。（創世記、六―九章、傍点は筆者）

ここでいう「全地の神」とは、地にみてるすべての人間の意である。この神話はもとをただせば、どこか一民族の神話だったのだろう。とすれば、その場合は完全な選民神話である。しかし聖書に掲載されたからにはキリスト教が世界宗教となるための意図がはっきりあらわれねばならない。したがってここでの選民の意図は一民族・一種族をさす意味のものではなくて、人間のうち「神の子として選ばれるもの」の意に解すれば適切であろう。^①

注

① ノアの洪水は、聖書によれば神エホバが人類を罰するためにひき起したとなされているが、この話は聖書特有のものではなくて、これによく似た話がメソポタミヤばかりでなく、古代オリエント一帯の広範囲にわたって愛好されていることが立証されている。また洪水については、メソポタミヤ平原をスッポリ水中に没するような大洪水は歴史上には記録されてい

い。しかしこの平原がたえず洪水におびやかされていたことは考古学上の調査によっても知ることができるのであって、たびたび洪水のあったことはこの地方を最近発掘してみると、集落遺跡のあとに厚い粘土層があつて、更にその下に住居跡がみつかることによつて証明されている。

ギリシヤ神話にも、これと同質の洪水伝説がある。アポロドロスの一卷七章では、プロメデウスの息子デウカリオンの時代に洪水があつたとなし、主神ゼウスが青銅の種族をほろぼそうとしたとき、デウカリオンは一そうの箱舟をこしらえて難をのがれ、洪水が終つてからゼウスに犠牲をささげ、そのお礼としてアカイア人とイオニア人、それにドーリヤ人のみが救済された、となつてゐる。

なぜギリシヤ神話は、こうした洪水伝説を伝誦させるのだらう。それは惟うに、ふるくからのひらけたギリシヤ半島では、いろんな先住民族がいりまじつて棲息していたろうし、そんな状態のなかで、ある特定の民族だけを優位に位置づけるためには、どうしてもこうした神話を故意にこしらえて、その効果に期待する必要があつたからであらう。①

そういう趣向では、この神話は民族の神慮による救済を誇張して語る選民思想の表明ということになる。①
こうしたいきさつでかたられるのが洪水神話である。けれどもこれらの神話は、そのほかにいくつかの古代思想を表明している。古代人にとって、人間を全滅させるほどに最もおそれられたのが洪水であること、古代人は洪水という自然現象を、神意としてのみうけとつたこと。したがつてそれを征服しようとする意識がまったくみられないばかりでなく、ただ神の恩寵によつてのみそれから救済されようと信じきつていたこと。そうしたまったく受身の姿勢だけが古代人間の洪水に対処できる対策応のすべてだったことを物語っている。

注

- ① こうした神話をもつ民族も調べてみると、それは聖書の取材した古代メソポタミアのセム族、ないしはギリシャ神話をものがたる古代ギリシャ人のみではない。世界いたるところに伝えられる一般的な民族神話であって、その分布は学界に知られているだけでもその数五〇〇を超え、二五〇以上の民族ないし種族に語りつたえられているといわれる。Ph. Freund, *Mythos of Creation*. (1965) p. 13.